

---

## essais ころみ 2025年4月

---

2025年4月1日（火） 曇

新年度が始まった。天気は曇だけど、4月の声が晴々しい。環境の変わった人は落ち着くまでひと月はかかわる。途中でいや気がさすのはよくあること、気を取り直してやりすごすと、案外居心地よい場合あり。

— 学びはうそをつかない (4) —

『自分を教える』 ④

よくもわるくも学びはうそをつかない。ときに自分の未熟さに呆れることがある。やさしく指摘されて、ハッとして、自分を省みる。この姿勢をなくすと、たぶん、遅かれ早かれ、自分の道もとどえる。

日常の中に哲学がある。そう実感したのは事務所開設から1年ほどのことだった。事務所の当方のパソコンを、友人が来て独り占めする。仕事の準備に追われ、焦っているのは理解できる。

しばらく黙ってみていた。見られていると気づいているのに、離れない。“いざという時には、自分のことしか考えない人だ…”。普段は人なつっこく、当所に頻繁に出入りしていた。

人となりがわかったことがあるのかもしれない。本人がパソコンから離れるまで何を言わなかったのは、苦々しい気持ちはあった。でも案外冷静に、“日常の中に自分を試される場面があるなあ…”と感じていた。

“日常の中に哲学がある…”。そう頭に浮かんだ瞬間のシチュエーションは今もはっきりと憶えている。「モンテニュー」の『エッセー』を知ったのはこの5年後だけど、「自分を観察する」意識の芽生えだったか。

同じ社会に住んでいても、住む世界は異なる。生活文化、流儀、不文律がちがう。違いがわるいわけではないので、互いの世界を尊重して、関係は絶った。そうするほどのことも別にあった。

事務所開設当初3年は、自分を試される、その分、自分を教える前期になった。「安定」からは得られないものを得たと思う。

2025年4月4日（金）清明 晴れ

大阪市内でも桜はほぼ満開。今日の日中からそこかしこで春の宴が催されそう。この週末が見頃、気温も20℃前後の予報。絶好の花日和。

— 学びはうそをつかない （4） —

『自分を教える』 ⑤

2022年8月8日に、ふとその気になり『老子』の音読を始めた。本は4年前にちょっとしたきっかけで2冊訳者別で買ってあった。

いつか読むタイミングがくるだろうとそのままにしてあったが、その時がきた。数日後に知ったのだが、その日は中井久夫先生が他界された日だった。

『老子』は最初の音読から4回再読した。左記に案内しているように、『孫子』、『モンテーニュ』再読へと音読の習慣がすっかりついた。サイトにアップすることで一定の緊張感ももてた。

かれこれ3年、何ごともよしあしが見え始め、気づく頃。「岡潔」ほどの「宗教によって境地が進んだ結果、ものが非常に見えやすくなったという感じ」まではいかないにしろ、すこしは通じる。

3年前の読み始めの時に音読の意義・効果は、今ははっきり見えないと自分で語っている。それは追って見えてくると話している。

知的文化遺産に継続的にふれながら、知的に変らないなんて、あり得ない。好感するにしろ、否定的にしろ、認識を何かしら更新する。

“ちょっと冴えてきたなあ…”。先日そう感じる瞬間があった。「冴え」は一時的だろうけど、自分でそう思えた。なかなか愉快的な感觸、感覚だった、顔がほころんだ。

同時に「学び」の意義を実感できた感じがした。大事さは重々わかっているつもりだけど、心の底からじわっとわかる感じだった。

だから今さらながら、「学び」を大切にしようと肝に銘じた。あえて意識するようにしようと自分に言い聞かせた。

「学び」の再発見。事務所開設から31年目に入るこの4月に、この境地に立てたのはよかった。

「前へ進むのに謙虚さでいく人と理想追求でいく人があるとすれば」（岡潔）、前者でありたいと思う。

2025年4月6日（日） 絶好の桜見日和、近くの公園へ



2025年4月7日（月） 晴れ

5、6日の土日は絶好の桜見日和だった。近くの小さな公園で小一時間昼ごはん飲みをした。周縁と中央の桜がほぼ満開。いつもより人は多かったけど、ゆったり愉しめた。今は近場がいい。

— 「印象」は未来の予告か  
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か— （1）

『直感から直観へのリレー』 ①

2月のリーズレター立春に書いた「印象」と「閃き」、せっかくだからこの機会にもうすこし考えてみよう。

「印象」に注目するようになったのは事務所をもってから。自宅事務所の間はそれほど気にとめていなかった。事務所を開設したことで友人知人たちが、自分の友人知人に、「こんな人がいる」を話し、ときには一緒に訪ねてきた。

もともと人の話はよく聴くほうだし、自分もしっかり話す。話題に応じて対話が進み、発展する。個人的にそれはごく自然なコミュニケーションスタイル、LYK流パーソナル・アシスタントの役割の一つと考えていた。もちろん今もそう。

そうした対話をいろいろな人と交わすことになったおかげで、えっ、そうだったの？と今さらながら一般社会の不文律を知ることになった。「普通はそんな風にしませんよ、考えませんよ」と何度となく聞いたのだ。

そうすると自ずと自分に問うようになる、なぜそういうことがわからずに来たのか、どのようにして今の自分ができたのか。視線と思考が過去をたどることになった。

そこで思い出されるのが、うんと時間は経っているのに、鮮明に、感覚までも憶えている過去の出来事、場面。そこに手がかりがあった。

2025年4月12日（金）

クレオ大阪中央館そばの公園

この日は不安的なお天気で、急に雨が降って、晴れて、また降って。公園のソメイヨシノが散り始め、桜吹雪の路面。



2025年4月12日（土） 晴れ

今日は安定した晴れの日とか。大阪万博の開会式が午後からあるらしく、日和に恵まれた。ただ、開幕の明日は雨の予報。

一 「印象」は未来の予告か  
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー （1）

『直感から直観へのリレー』 ②

かずある「印象」の極めつけ、あるいは出発点は、一番目の冊子『哲樂の中庭』の第2章「過去」に書いた「記憶の情景」の一つ「夏の日の縁側」だろうと思う。

子どもなりに、宇宙というか、森羅万象というか、そういうもの感じていた。はるか昔のことだけどその時の心模様はカラダが憶えている。「岡潔」流に言えば、個の情緒がすでにそう備わっていた。

今ではこう言える。その情緒はずっと底流にあり、アイデンティの土壌にしみ込んで土台となっている。それもかなりどっしりと。

案外それに気づかず一生を終えるものかもしれない。でも、起業など、自ら大きな転機をおこし社会に揉まれると、性（さが）や業というようなものを思い知らされる。

多種多様の、四方八方からの反応がわが身に押し寄せるから、否が応でも自分を観察することになり、自分を思い知ることになる。

“人間、自分を超越することはできない…”と覚るが、限界があるという意味ではない。他の誰でも、その人ならではの個性、アイデンティがあるという捉え方。

だから、自分を思い知っても意外に爽快感がある。「境地が進んだ結果、ものが非常に見やすくなったという感じだった」（岡潔）に似ている、不遜ながら。

ところで「印象」の対象が人の場合、双方向の現象となる。こちらのうけた印象は、その前に相手がこちらにうけた印象に拠る場合がある。これがまた、なかなかおもしろい。

2025年4月13日（日） 雨の日曜、近所の公園の八重桜は瑞々しく



2025年4月16日（水） 晴れ

昨日は変りやすい天気、午後2時半ごろには大阪市内でもかなり強い雨がふった。気温も低く、夜はまたヒーターをかけた。雨が降り、今朝はすっきり青空。

一 「印象」は未来の予告か  
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (1)

『直感から直観へのリレー』 ③

『チャンスは心構えできている人だけ轟然する』（パスツール）は、チャンスは自分以外の他からやってくるから、そういえるのだと思う。

「心構え」は、物事に対するある種の覚悟。目にみえないが、「印象」には表れるはず。

そういえば知人の知人の女性のことを思い出す。金融機関に就職し中堅になり始めの時に伝統工芸の道に入った。生まれ育った関東を離れ、京都で住込み修業に入った。

まだ一年もたたない時期に初めて会った。小柄で細身、ショートヘア、化粧つけなし、素肌が瑞々しい。それだけでも十分印象的だった。

でもなんといっても、顔つき、表情。ぱっとみて、“うつくしい…!”と感じた。神々しい美しさ。まさに覚悟、潔さが表れている感じがした。

長い修業期間を終え、自宅工房をかまえ、職人へと独り立ちした彼女の道は、チャンスが自然に舞い込み、続いている。

伝統工芸の修業の道とは次元が違うけど、独自のスタンスで業を始める者には、孤軍奮闘が待っている。

それなりに通じると思い込んでいる〈独自〉であれば、なおさらで、始めたものの、やめるべきかと考えたほどだから、しだいにどこかで覚悟、あるいは前向きな諦めができた。

それが「心構え」になってか、ふり返ればチャンスのすべては他者の「印象」に端を発してやってきたと気づく。

“この人は…”。初対面の時にそう感じたと追って話してもらった人がいる。直接会う前にWebサイトをみて、同じ感想をもってもらった別の人もいる。

とって、10人いても大半の人には？のまま。でも100人いて1人には！の「印象」をもってもらった。そこから道がひらけた。

他者側の自分への「印象」には、未来への徴候がある。自分側の他者や外界への「印象」には暗示がある。そう言える気がする。

2025年4月21日（月） 晴れ

先週後半から急に暑くなった真夏日のところも多かった。19日の土曜の午前、“ちょっと堪えているなあ…”と感じた。感じられたから無理をしないようにした。昨日は昼寝をした。睡眠はやはり大事、堪えているのが取れた。

一 「印象」は未来の予告か  
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (1)

『直感から直観へのリレー』 ④

日々たくさんの人と行き交う。時々目をひく人もいるけど、ほとんどはその場かぎり。でも個人的に今も印象にのこる三人がいる。

一人はたぶん60代初めの女性、あと二人はともに30代後半の男性で、そのうち一人はイギリス渡航の帰りの飛行機でみかけた。

おそらくインド系で、白のまじった褐色肌はつやつや、中肉中背で上質だろうスーツが体にきれいになじみ、なぜか目が合ったその柔らかい笑みに気品が感じられた。

財閥系の超エリートか、ファーストクラスのアナウンスにゆったりと機内へ入っていった。1989年の夏のこと。

もう一人の男性は1984年頃、なんば高島屋1階化粧品売り場のすこし離れたところから店内の通路を足早にすぎる右半分から背中、歩く姿勢が颯爽としていた。

彼も中肉中背、服装は羽目を外さないカジュアルさ、髪はすこし伸ばしていい感じで流れ、お目当ての売り場があるのか、わき目もふらず、進んでいく。今も映像が浮かぶ。

さて女性の方はというと、これが格好いい。まだ会社員時代のこと、勤めていた会社御用達のカウンターだけの寿司店。上司同僚とカウンター端で食事していたとき、目の先正面の入口が開いた。

入ってきたのは女性、一人。なじみ客ではないようで、少し間があって、「お一人ですか？ どうそそこへ」と店主。そのまま正面のカウンターにすわった女性。

白髪まじりの髪をシニヨンにし、メイクはパウダーだけという感じ、うすいグレー色のワンピースに本珊瑚に違いないネックレスがシックに調和。入店から席について注文するまでの様子が自然で、堂に入っている。

ずっとみてしまった。上司と同僚に小声で正面をみながら、「カッコいいですね」と呟いた。心の中ではこんな印象の人になれたらいいと感じた。

三人とも、何がしかを物語っている。もし彼らのライフを知ることができたなら、直感したものは直観につながっていたんじゃないかと思える

東横堀川ぞいの遊歩道の八重桜、高麗橋そばに桐の花

